

家庭環境が及ぼす子どもへの影響

金澤 美佳

I 緒言

近年、十代の子どもによる凶悪な犯罪が多発している。事件を起こした子どもはどのような子どもだったのだろうか。どんな環境で育ったのだろうか。そして、何か悩みを抱えていたのではないだろうか。

一昔前までは、問題を起こしそうな子どもというのは、いわゆる「不良」と呼ばれる子どもたちで、服装や行動を見ただけでも、なんとなくうなずける場所があった。また、彼らも、心の悩みをそういった外面に表わすことによって自己主張していたのだと思う。ところが、新聞やテレビで報道される子どもの姿は、どこにでもある普通の家庭で育った、普通の子どもであるといわれている。そのことが親たちをさらに不安にさせている。

「今までいい子だったのに、突然の変化はなぜ……？」と思われがちであるが、問題を起こすということは、何らかの原因、背景が存在するはずだ。思春期になって種だねの悩みが現れてからの対処では難しくなる。大切なのは、それまでにどれだけ心のしつけが行われているのか、人間らしい心と社会性が身についているかであると思う。乳幼児期、児童期を通じて、「ヒト」が「人間」になるために、最低必要な養育者の関わり方というものがある。そのどこかが、あまりにも不十分であったために、子どもの鬱積した苦しみや弱さが、些細な引き金で爆発してしまったのではないだろうか。あるいは、子ども自身の持って生まれた素質を、身近な者が、十分把握していなかったことが、大きな要因であろうと考える。昔から「人は人によって人になる」といわれている。すなわち「どのように育てられたか」がその後のパーソナリティに大きくかかわっていると思う。

私が大学で幼児教育を学ぶにあたって、大きな影響を受けたドロシー・ロー・ノルトの『子どもが育つ魔法の言葉』には次のような詩がのっている。

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる

とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる

不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる

「かわいそうな子だ」といって育てると、子どもは、みじめな気持ちになる

子どもを馬鹿にすると、引っ込み思案な子どもになる

親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう

励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる

広い心で接すれば、キレる子にはならない
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる
見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ
親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る
子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ
やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ
守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ
和気あいあいとした家庭で育てれば、
子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

これは「子は親の鏡」という作者の詩であるが、子どもは親を手本として育つということ、毎日の生活での親の姿こそが、子どもに最も影響力を持つということを表現している。

成長過程の子どもの傍らにいる大人の影響は計り知れないものがあると思う。では、いったい親の養育態度は成長過程の子どもに対してどのような影響を与えているのだろうか。今後、幼児教育に携わっていく者として、改めてその役割の重大さに気づくためにも、子どもの心の内面について学んでいきたいと思い、「家庭環境が及ぼす子どもへの影響」として本研究のテーマを設定した。

II 研究の目的

本研究は以下の2つの視点から、研究テーマについて検討したいと考えた。

1 人格の形成について

児童心理学によると、人格（パーソナリティ）とは、ある個人に見られるその人らしさを指すもので、その人に特有な情意や行動面での反応傾向、知的な面での特性を表している。人格は生まれながらにして存在するものではなく、発達の過程で形成され、人格の基礎のほとんどは6～7歳以前に形成される。形成要因には次のことが挙げられている。

- ① 親のしつけ……しつけが厳格か寛容か、溺愛か放任かという親の養育態度によるもの。
子どもは親を見て育つといわれる。
- ② 家族的条件……人格形成に最も影響を持つ。家族の関係がうまくいっているかどうか、両親の性格、家族の構成、生活様式、家庭の雰囲気によるもの。
- ③ 外見的条件……名前がなじみにくかったり、持ち物や服装が時代に合わないようなとき、劣等感によって性格に影響を与えることもある。
- ④ 身体的要因……体型、容貌、体格などの面で、他の子どもより劣っていたり、虚弱な場

合など。

- ⑤ 心理的条件……気質、知能、興味、感受性などで、ときに知能の高い時と低い時に、形成上の問題があり、ともに人格に自己中心的で非協調的な面をつくる。
- ⑥ 社会的条件……属する地域社会の特性、家庭の社会的経済的地位、友達間での位置によるもの。

本研究では、上の6つの形成要因のうち、①親のしつけ、②家族的条件に注目して、それらが子どもの人格形成にどのような影響を与えているのかについて考えていきたいと思う。特に、しつけが厳格か寛容か、溺愛か放任かという親の養育態度は子どもにどのような影響を与えるのだろうか。

また、一般に人格の形成要因として取り上げられることはないが、子どもが虐待を受けた場合、人格形成に大きな影響を与えることは明らかとなっている。最高裁判所事務総局家庭局の調べによると、平成13年には全国の家裁裁判所に申し立てられた虐待件数が169件となり、平成元年の約12倍、対前年比の約1.2倍という急激な伸びを示している。

愛情の間違った表現や愛情からかけ離れた関わり方で親子関係が悪循環に陥っている結果として起きていること、あるいは行き過ぎたしつけとして虐待が起きていることを踏まえ、虐待になりえる親の養育態度として、それが子どもに与える影響についても探っていきたいと思う。

2 家族の関係から

緒言において、「成長過程の子どもの傍らにいる大人の影響は計り知れないものがあると思う」と述べた。ここで、家族の役割を考えてみると、家族というのは、子どもが初めて出会う集団である。家庭の文化を受け、家族と子どもの相互作用によって、子どもは成長していくのだと思う。家庭の中で振舞い方を覚え、言葉を覚え、一定の価値観を身につけ、それを用いて社会で生きていくことになる。この価値観ということを考えて、親の考えや家庭環境が、その形成に重要な影響を及ぼしていることは明らかであると思う。

社会の変化とともに核家族化や少子化などが進み、それらの影響を受けて、家族の関係も変化している。また、繰り返される子どもたちの事件や問題行動の背景に、父親の不在や父性的な原理の崩壊、母親の過保護が指摘され、家族のあり方が問題として取り上げられており、それに伴い、新しい時代に対応する好ましい親子関係、心の通った家庭を築こうという動きが見られる。平成8年6月中央教育審議会答申によると、「これからの家庭教育のあり方」として、次のことを挙げている。

- ・家庭教育は、すべての教育の出発点

家庭教育は、乳児の親子のきずなの形成に始まる家族とのふれあいを通じ、「生きる力」の基礎的な資質や能力を育成するものであり、すべての出発点である。

- ・家庭の教育力の低下

人々の価値観の大きな変化に伴い、親の家庭教育に関する考えにもその変化が生じ、無責任な放任や過保護、過干渉が見られるなど、その教育力が低下している。

・親の家庭教育に対する責任の自覚

家庭教育については、とすれば、母親に責任がゆだねられ、親の存在感が希薄であり、親の家庭教育に対する自覚を求めたい。

現代家族の問題点として、世間から閉ざされた母と子だけの関係が挙げられると思うが、母子関係の密着度が高ければ、それだけ母と子の関係も問題のあるものになる可能性が高くなるのではないだろうか。例えば、母親の子どもに対する過剰な期待や、同一視してしまうなど、子どもにとって好ましくない影響を与えてしまうのではないかと考える。そこで、現代の家族関係が子どもにどのような影響を与えているのかについて考えていきたいと思う。

以上のことを踏まえて、本研究は幼児期の子どもを持つ親を対象に、しつけに対してどのように考えているのか、子どもにどのように接しているのかという親の養育態度の実態を探るとともに、大学生を対象に子どもの頃についての親との関係と性格検査結果との関連から、家庭環境や親の養育態度が子どもの人格形成にどのような影響を与えているのかについて明らかにすることを試行する。

III 研究・調査方法

本研究を進めるにあたり、以下の方法で検討した。

1 文献調査について

人格形成ということで、発達心理学の分野から、発達の意義と要因を明らかにし、人格の基礎作りが行われる乳幼児期の発達について、これまでの学説をもとに考察していく。

親の立場からは、しつけに関する文献や育児書などを参考にし、しつけや育児の悩みやそれに対する見解から、親の養育態度が子どもにどのような影響を与えているのかについて考察し、望ましい家庭環境のあり方を探る。

その他、精神分析や心理学の分野から、親の心理や子どもの心理について参考にするものとする。

2 アンケート調査について

家庭環境がどのように子どもの人格形成に影響しているのかということを明らかにするためには、家庭において子どもがどのように人格を形成していくのかという時間の経過をたどっての成長の過程をみていく必要があるだろう。しかし、それを探る調査には多くの時間を必要とするために、本研究では、一方で幼児期の子どもを育てている親のしつけについての実態について調査することと、もう一方で青年期の学生を対象として、パーソナリティの特

徴を探り、それが過去の経験、つまり子どもだった頃に親から受けたしつけや親子関係とどう関係しているのかについて明らかにすることにより、家庭環境が及ぼす子どもへの影響について考察していく。よって、以下の2つのアンケート調査からデータを分析する。(略)

IV 結果と考察

1 乳幼児の発達について (略)

2 親の養育態度と子どもへの影響

(1) しつけについて

子どもが、社会の中で独立して生きていける人間へと発達していくためには、親に深い愛情を持ちつつも、それに寄りかからない精神的な自立を作り上げていくとともに、一人前の人間としてふさわしい行動様式も身につけていかなければならない。社会生活に合わせた必要最低限の行動様式を身につけさせる、つまり子どもをしつけするということは、親の責任であるといえる。

幼児期の反抗は、自我の芽生えと生活習慣のしつけの時期が重なっているところに原因のひとつがある。親にとって幼児の自我の発達はしつけの妨げと思われるかもしれないが、しつけが本当に身につくには、幼児が自分の考えで何かをやらうとする気持ち、あるいは独立しようとする気持ちに対して、しつけがうまく呼応した場合であるといえる。犬や猫をしつける場合は、あることができるようになりさえすればよいが、幼児をしつける場合は生活習慣が型どおりできるようになればそれでよいというのではなく、幼児が誰に言われなくても自ら進んで実行し、やがてその行為の意味も理解できるようになることが幼児のしつけの目的である。よって、生活習慣のしつけといえども、子ども側の条件、例えば、子どもの自我や能力を無視して、親が一方的に子どもの行動を規制することには無理が生じてくるのだと考えられる。

習慣形成において、子どもの「やらうとする気持ち」を大切にするためには、ふさわしい環境を整え、うまくいったときには十分ほめてやる、そうでない場合には励ましてやるのが大切であると考えられる。場合によっては叱ることも必要であろう。

また、生活習慣の自立は常に子どもの精神発達と密接な関係を持つものであるが、習慣を身に付けていく過程において、いわゆる学習の原理が働いていると考えられる。例えば、衣服の着脱一つをとってみても母親に「こうすればうまくできるのよ」と教えられ、そのとおりにやってみたらうまくでき、そこで「よくできたわね」とほめられる。ほめられると子どもは嬉しいのでまた同じようにやる。繰り返していくうちに学習が成立するという仕組みである。

この場合母親などからほめられることは、子どもにとって嬉しいので報酬といわれる。反対に叱られることは罰となる。子どもは叱られないように行動しようとするから罰も報酬と同様に学習を進める力となる。以上のことから、「ほめる事」と「しかる事」はしつけ

に大きくかかわっているといえる。

(2) 「ほめられる事」「しかられる事」について

子どもは体験の中で成長していく。体験という言葉からは、生活技術の習得や、自然体験、対人的なスキルなどが想起されるが、快・不快、喜びや悲しみ、怒りや嫉妬といった情緒的体験も重要な体験である。中でも、「しかられる」という体験は、社会のルールや道理を教えてもらいながら、「許す・許される」という関係の中で、心の温かさを増していく行為ではないだろうか。しかし、しかられる体験が生きる土台には、自分が愛されているという安心感と人から認められているという自信や自尊心が必要である。子ども自身に、自分に対する自信や他人への信頼感がなければ、しかられることは嫌な事、辛い事で終わってしまう。そして、この自信や自尊心につながるものが、「ほめられ、認められる」体験であろう。ほめられる体験としかられる体験は、子どもの心の成長に際してどちらも必要であり、またその上手なバランスも求められる。

では実際に子育てをしていく上で、親の立場からその実情はどのようなのだろうか。次の表1～3は、現在幼児期の子どもを育てている親15人に質問した結果である。

表1 ①普段、あなたはお子さんを「ほめる事」「しかる事」どちらのほうが多いですか？

ほめる事	どちらかといえばほめる事	同じくらい	どちらかといえばしかる事	しかる事
1人	1人	4人	8人	1人

普段子どもと接していて、「ほめる事」「どちらかといえばほめる事」の方が多くと回答したのは15人中2人であった。育児書に目を通していても育児に関する親の悩みは本当に様々であり、ついつい口うるさくになってしまうのではないかということがうかがえる。

表2 ②実際、あなたはお子さんを「ほめる事」「しかる事」どちらの方が難しく感じますか？

ほめる事	どちらかといえばほめる事	同じくらい	どちらかといえばしかる事	しかる事
1人	4人	5人	4人	1人

「ほめる事」「しかる事」どちらが難しく感じるかは親によってそれぞれである。しかし、普段ほめる事のほうが多いという親はしかる事のほうが難しいと感じており、逆に普段しかる事のほうが多いという親はほめる事のほうが難しいと感じているようだ。これは親の性格にもよるものと思われる。

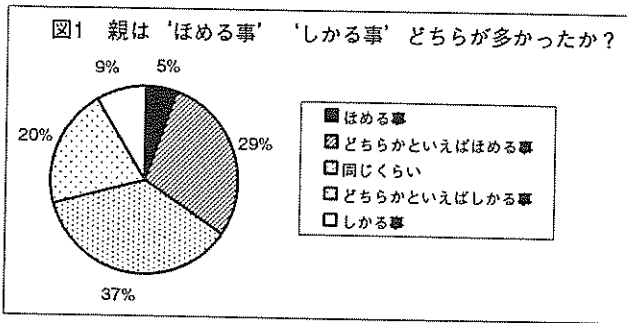
表3 ③親の都合や、感情だけでしかる事がありますか？

よくある	たまにある	どちらともいえない	ほとんどない
3人	10人	0人	2人

イライラしている時や何度言ってもきかない時などは親の都合や、感情だけで叱ってしまうことも多いようである。しかし、しつけをするにあたって気を付けていることを自由記述してもらったところ、「頭ごなしに怒らないこと」「感情的に叱ることがあるので気をつけるようにしている」「自分が冷静になってまず理由を聞く」といったこともあげられていた。

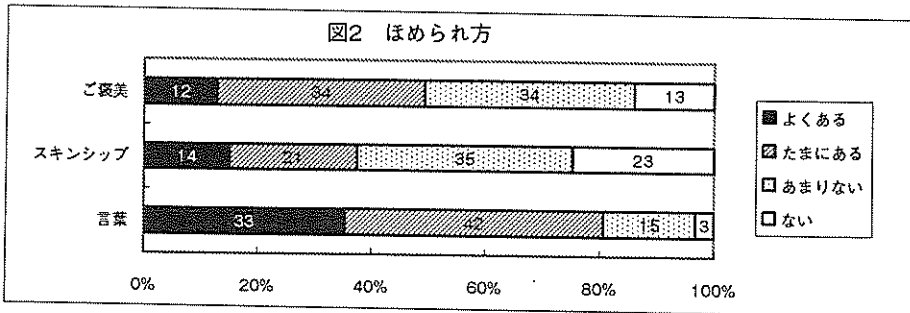
結局のところ、その状況で親が子どもの行為をどう受け止めるか、それに対してどう接するかは親次第であるといえる。しかし、子どもは家庭を選べない。では、子どもは親のほめ方・しかり方をどのように受け止めているのだろうか。

図1は学生に対するアンケートで、「あなたの親は『ほめる事』『しかる事』どちらのほうが多かったですか?」という質問に対する回答結果である。



「どちらかといえばほめる事」も含め、「ほめる事」のほうが多かったと答えた学生が全体の34%、同じくらいが37%、「どちらかといえばしかる事」も含め「しかる事」のほうが多かったと答えた学生が29%だった。

では、親の「ほめる事」「しかる事」は、子どもにどのように影響しているのだろうか。図2は同じく、学生を対象にどのようにほめられる事が多かったかを尋ねた結果である。

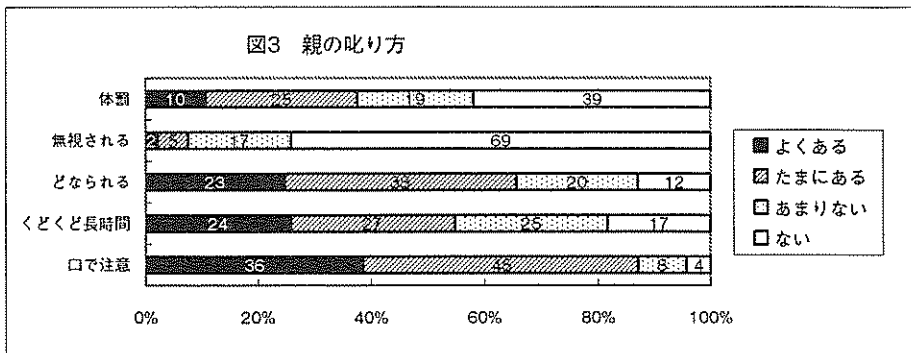


「えらかったね、よかったね」と言ってくれるなど、言葉での評価を「よく・たまに」されていたと答えた学生が、合わせて81%であった。こうした言葉は子どもにとって、「自分のことをわかってきている」「見てくれている」という安心感や、大人に対する信頼関係に結びつくと考えられ、効果的で意味のある励ましであるといえる。しかし、これらの言葉を親から「あまり・全然」言われていないと答えた学生も19%いる。このうち、言葉では

められる事は少ないが、抱きしめたり、頭をなでるなどの「スキンシップ」、あるいは、「ご褒美」をくれたりしてほめられることがあると答えた学生と、「スキンシップ」も「ご褒美」も全く無かったと答えた学生の2通りがある。前者は親のほめ方の表現方法の違いによるものと考えられるが、後者では親にほめられる事がなかったということになる。実際、図1では「親はしかる事の方が多かった」に該当しており、共通して性格に関するアンケートでの「人の悪いところよりも、良いところを見るようになりますか?」という質問に対して、「いいえ」と答えている。これは、親の価値観を受け継いでしまった為だといえるのではないだろうか。

また、図1で「どちらかといえばほめる事」も含め親が「ほめる事」のほうが多かったと答えた学生のうち、81%が同じ質問に対して、「はい」と答えている。このことから、子どもの頃に親から認めてもらえる経験が多ければ、成長してからも他人に対して肯定的に見ることができる傾向にあるといえる。

次に、図3はどのようにしかられる事が多かったかを尋ねた結果である。



親からしかられる場合、「よくある」「たまにある」を含めて、「ダメだよ」など口で注意される」が87%とほとんどだが、「どなられる」66%、「言葉で長い間くどくどとしかられる」55%も半数を超えており、「叩かれたり、体罰される」38%、「無視される」8%もある。

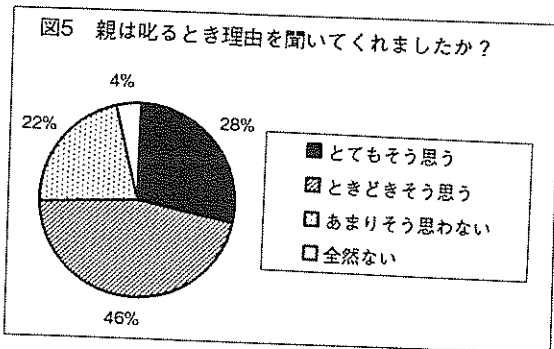
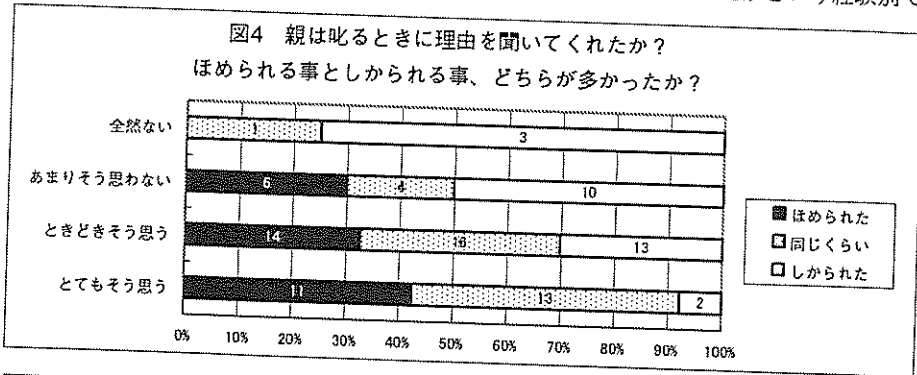
「叩かれたり、体罰される」については、口で注意しても聞かなかった場合に叩かれるということも考えられるが、問題はその度合いにもよるだろう。また、「愛すればこそ、叩く」ということもあるかもしれないが、幼児期の子どもにこういう理屈は伝わらない。大人が叩くということは、子どもに「必要なときは他人を叩けばいいんだ」ということを教えることになる。自由記述には「線香を押し付けられた」「棒で殴られた」という回答もあった。子どもにとって体罰は、しかられる事で何かを得るということよりも辛い経験や嫌な思い出として記憶されるのではないだろうか。

「言葉で長い時間くどくどとしかられる」「無視される」についても、子どもの行為にも

よるだろうが、精神的苦痛を伴うしかり方を頻繁にしても果たして効果はあるのだろうか。「言葉で長い間くどくどとしかられる」について、図1の「どちらかといえばしかる事」も含め、叱られる事の多かった学生の79%の学生が、この項目に対して「よくある」「たまにある」と答えている。それに対して、「どちらかといえばほめる事」も含めほめられる事の多かった学生では45%、同じくらいと答えた学生では44%である。よって、くどくどとしかるようなしかり方では、しかられた内容よりも「しかられた」という事実だけが残るということも考えられる。

また「無視される」ことが「よくある」「たまにある」と答えた学生7人について、自分の性格について答えてもらったアンケートの「あなたは劣等感が強いほうですか?」という質問に対して、7人全員が「はい」と回答し、「悲しみや憂鬱な気持ちになることがよくありますか?」という質問に対しても、6人が「はい」と答えていた。加えて、共通して他人の様子を伺って行動をとる様子があげられる。このことから、親が子どもを無視するという行為は、子どもの人格形成においてよくない影響を与えていると考えられる。

また、しかるときに、子ども側の言い訳や理由を聞いてくれるかについて尋ねた結果が図4である。そのうちのほめられた事、しかられた事どちらが多かったかという経験別で



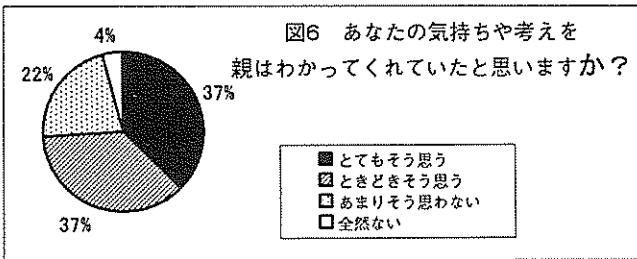
の割合を示したものが図5である。(どちらかといえばという回答も含む)

「ときどきそう思う」も含め、74%の学生が「しかるときに理由を聞いてくれていた」と答えている。しかられる側の子どもにとって、親はそれなりに理由を聞いてくれていて、妥当なしかり方をしてい

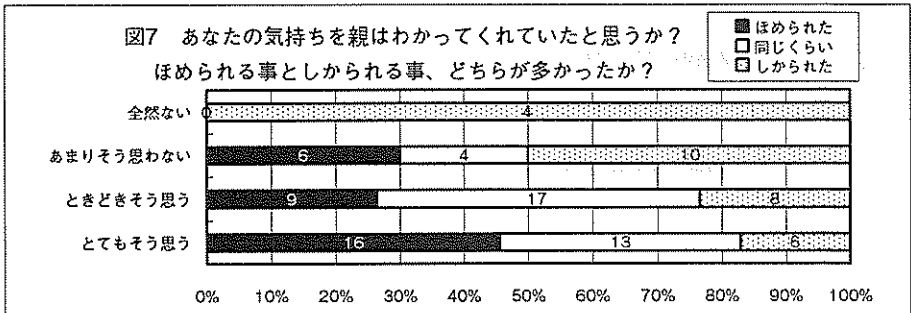
ると判断している場合が多いようである。

しかし、ここで注目したいのが「しかるときに理由を聞いてくれていたか」という事と、ほめられる事・しかられる事の実験別の相関性である。図5から、「とてもそう思う」と答えているのは、ほめられた経験が多い学生の割合が多く、逆に「全然そう思わない」と答えているのは、しかられた経験が多い学生の割合が多く、その関係は負の相関を示しているといえる。このことから、親がしかる場合に理由を聞いてくれた場合にはしかられたことに子どもも納得しており、逆に、一方的にしかられた場合においても、くどくどとしかられた場合と同様にしかられた内容よりも「しかられた」という事実だけが残るのではないだろうか。

「親はしかるときに理由を聞いてくれましたか？」という回答結果からは、親子関係との関連も感じられる。図6は同じく、「あなたの気持ちや考えを親はわかってくれていたと思



いますか？」という質問に対する結果を示し、それをほめられる経験・しかられる経験別の割合で示したものが図7である。



「ときどきそう思う」も含め、74%の学生が「親は自分の気持ちや考えをわかってくれていた」と答えている。この数字は図4でも示したように「親はしかるときに理由を聞いてくれましたか？」という質問の回答結果と一致している。また、図5と図7を比較しても、その割合はほとんど同じような結果となった。このことから、親がしかるときに、頭ごなしに「悪い」としかりつけるのではなく、なぜその子がそういう行動をとるのか、ゆっくり考え、子どもの言い分も聞くことが大切であるといえる。そうすることで、子どもは「自分のことを親はわかってくれている」と思えることができるのである。しかるとい親の

行為も、それを受け入れる子どもの心がなければ意味のないものになってしまう。子どもが親の言葉を受け入れるためには、親が自分の話をよく聞いてくれるし、自分を大事にし、受け入れてくれているという「信頼感と心のゆとり」が必要であろう。それは、親子の信頼関係に大きく影響するものと考えられる。

(3) 「ほめられる事」「しかられる事」体験と性格との関連

性格検査では、学生に自分の性格について答えてもらい、「はい」を1点として計算する。それを表4のようにCP（父親的）・NP（母親的）・A（知性・理性）・FC（積極性）・AC（順応性）の5つに分類することで、その得点の優位性から各自我状態の特徴をみるものである。各特色として、次のことが挙げられている。

表4

	プラスの特徴	マイナスの特徴
CP	理想・良心・正義感・権威・道徳的	非難・叱責・強制・偏見・権力
NP	思いやり・慰め・共感・保護・寛容	過保護・甘やかし・黙認・おせっかい
A	知性・理性・分析的思考・適応手段	物質万能主義・自己中心性
FC	天真爛漫・自由な感情表現・積極性	衝動的・わがまま・無責任
AC	我慢・感情の抑制・努力・慎重	主体性の欠如・消極的・自己束縛

また、性格検査の結果を「ほめられた」「しかられた」経験別にして各得点の割合ごとに表したのが図8-1, 2, 3, 4, 5である。

図8-1～図8-5（略）

5つの分野のうち、「ほめられた」「しかられた」経験別でグラフに差が表れたのは図8-1のCPの得点と、図8-4のFCの得点であった。CPの得点の割合で見ると高得点に、FCの得点の割合で見ると低得点に「ほめられた」経験の多い学生がいない。

CPの得点が高い場合は、理想が高く独善的、頑固で懲罰的な面があり、他者否定的な特徴がある。逆に低い場合は、友好的で他人や社会を批判したり、攻撃したりしないという特徴がある。また、FCの得点が高い場合は、遊び好きの行動派、自発的で創造的、自己肯定的な特徴がある。逆に低い場合は、感情を抑制し、あまり物事を楽しめない、陰気といった特徴がある。

CPとFCの特徴から、「ほめられた」経験が多い学生は自他肯定的であり、他の人との間に暖かい交流が行われやすく、自分を適切に表現でき、人間関係がうまくいきやすい自己状態であるという傾向がうかがえる。つまり、子どもは親からほめられることで、自分は認められ愛されているのだと感じ、自尊感情を高めることになる。また、自分をほめてくれる親を見て育つことで、友達との関係でも相手の良い所を認めて仲良くやっていくことの大切さを学んでいると考えられる。

反対に、「しからる事」について、子どもの心を適切に成長へと導くものもあれば、子ども

の心を傷つけ萎縮させてしまうものも少なくないということがいえる。子どもは、しかられると、頑張りそうと思うよりもがっかりきてしまい、自分のやったことを正されているだけだとは思わずに自分が嫌われていると感じてしまう。これが自己肯定感の低さにつながっていると考えられる。しかりつけて、子どもの感情を押さえつけているのであれば、上手な感情のコントロールができなくなってしまい、自己主張する前に相手に批判される限界以上のところで折り合いをつけてしまうようになるだろう。また、親がいつも文句ばかり言っていたとしたら、子どもは人をけなすことを覚えて、物事のいい面ではなく、悪い面を見るようになると考えられる。

3 現代の家族関係が子どもへ与える影響

これまで親の養育態度が子どもに与える影響について述べてきたが、社会の変化に伴い、家族の形態も変化している。よって、子どもを取り巻く環境や、親子のかかわり方も形態を変えている。問題として挙げられていることが子どもにはどのような影響があるのかについて文献調査からまとめてみた。

- (1) 親の溺愛と少子化 (略)
- (2) 自由と放任 (略)
- (3) 父性原理の崩壊と母親の孤立 (略)
- (4) 児童虐待の問題 (略)

V まとめ

人間というのは、「こんなほめ方をしたら、子どもは必ずこう育つ」「こういう叱り方をしたら、子どもはこう歪む」というように単純な機械のようなものではない。しかし、人間にとって、もっとも大切な愛情や感情にふれる教育は、意識のあるなしにかかわらず生まれた直後から始まっているのだといえる。子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることによって、自分も大人を愛し、信頼していくようになる。そして、一つの体験やコミュニケーションが記憶され、人格形成にかかわっているのだと思う。

子どもが最初に出会う社会は家庭である。家庭での体験やしつけが子どもの生活能力に大きく影響する。生活能力をつけることは生きていくうえで必要なことであり、すべての土台となるものである。そして、その相互関係の中での「ほめること」「しかること」は子どもと大人の人間関係にかかわる営みであり、さらに、子どもが自分の内面に気づいていく事につながる。また、子どもは自分が何をしたら誉められ、何をしたら叱られるかという体験を通して、親は何を良しとし何を悪いと考えているかを学んでいる。よって、親はあらゆる場面で子どもに、親の価値観を伝えているといえる。

子どもはいつも親の姿を見ている。常に親から学んでいる。親は、子どもにとって、人

生で最初に出会う、最も影響力のある「手本」であるといえる。毎日の暮らしの中で、親がどう子どもを受け止めて、どう子どもと接しているのか、そして親自身がどんな生き方をしているか。それが、最も子どもの人格形成に影響しているのだと考えるのである。

本論文では、乳幼児期の発達を踏まえて、親の養育態度が子どもの人格形成にどのように影響しているのかについて述べてきたが、同じ親から生まれて同じ家庭で育ったとしても、「きょうだいで性格が違うのはなぜか？」という疑問が生じてくる。この点については研究・分析できなかったが、主婦の友社出版の『きょうだいの子育て』の中に、0～6歳のきょうだいを育てている親のアンケート調査から、出生順位で性格が違うのはなぜかという視点で分析したものがある。これによると、上の子的な性格と下の子的な性格があり、生まれつきいろいろな子がいるのにもかかわらず、出生順位によって性格が違うということは、それを生み出すメカニズムとして親の育て方が大きく影響を及ぼしていると考えてよさそうだと結論づけている。つまり、出生順位によっての環境要因や、親の子育ての経験の有無も大きくかかわっていると思うが、それによって親が上の子として接する、または下の子として接するといった、親のその子どもに対する接し方の違いによっても性格に違いが出てくるのではないかということが考えられる。親が子どもをどう受け止めているのか、それが養育態度の根底にあるのではないだろうか。

現代の家族関係の問題という面からも、社会や時代の変化に応じて、望ましい家庭環境や家族関係のあり方を探っていくことは常に課題であると思うが、子どもに与える影響について考えたとき、まず親自身が、子どものありのままを受け止めているのかどうか、そしてどう接しているのか、見つめ直してみるということも必要なのではないかと思う。